2023年10月29日礼拝説教要約

ローマ人への手紙に聴く㉑

「使徒パウロの痛み」

（ローマ9・1～18）

一、使徒パウロの心の痛み

1節、2節をご覧ください。〈私はキリストにあって真実を語り、偽りを言いません。私の良心も、聖霊によって私に対し証ししていますが、私には大きな悲しみがあり、私の心には絶えず痛みがあります。〉と、パウロは語りました。なぜこのように語り始めたのでしょうか。8章において、キリストにある神のすばらしい働きを語ったからです。なのに、肉による自分の同胞であるイスラエルが斥けられているのはなぜか、という思いです。

そこで語ります。3節です。〈私は、自分の兄弟たち、肉による自分の同胞のためなら、私自身がキリストから引き離されて、のろわれた者となってもよいとさえ思っています。〉と。パウロは、「ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男と女もありません。あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです」（ガラ3・28）と語りつつも、「私はイスラエル人である」という意識を持っていました。それが、3節の背景にあります。

さらに語り続けます。4節より5節の途中までです。〈彼らはイスラエル人です。子とされることも、栄光も、契約も、律法の授与も、礼拝も、約束も彼らのものです。父祖たちも彼らのものです。キリストも、肉によれば彼らから出ました。〉と。ここからは、「どうして、イスラエルが斥けられているのですか」というパウロの思いが伝わってくるような気がします。

二、パウロの自問神答

6節以降は、パウロによる自問神答です。イスラエルが斥けられているかのような現実に直面して、パウロは自分に向かって「神のことばは無効になったか」と問いかけたのでありましょう。そして神より答えを得て語っています。それが6節です。〈しかし、神のことばは無効になったわけではありません。イスラエルから出た者がみな、イスラエルではないからです。〉と。〈イスラエルから出た者がみな、イスラエルではない〉とは、どういうことなのでしょうか。再び神からの答えを得て語っています。7節です。〈アブラハムの子どもたちがみな、アブラハムの子孫だということではありません。むしろ、「イサクにあって、あなたの子孫が起こされる」からです。〉と。

たいせつなのは、主の約束を待つことです。これが、パウロによる自問神答です。8節、9節です。〈すなわち、肉の子どもがそのまま神の子どもなのではなく、むしろ、約束の子どもが子孫と認められるのです。約束のみことばはこうです。「わたしは来年の今ごろ来ます。そのとき、サラには男の子が生まれています。」〉と。神のことばは効力を失いません。約束に従って生まれる子供イサクが、子孫と見なされます。

三、神の主権によるご計画

それは、イサクとリベカの子供についても言えます。兄はエサウ、弟はヤコブでした。二人は双子でした。長男のエサウは、外見からするならイサクの跡継ぎとしてふさわしい人物でした。一方のヤコブは兄を騙してでも、祝福を横取りしてしまう罪深い性格の持ち主でした。ですが、ヤコブが世継ぎとして選ばれました。なぜでしょうか。私たちはすぐに理由を詮索します。ですが、パウロは語ります。神の自由な御意思による、と。11節より13節です。〈その子どもたちがまだ生まれもせず、善も悪も行わないうちに、選びによる神のご計画が、行いによるのではなく、召してくださる方によって進められるために、「兄が弟に仕える」と彼女に告げられました。「わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ」と書かれているとおりです。〉と。13節の〈「わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ」〉はマラキ書からの引用です。神の選びに、私たちが考えるような理由は当てはまりません。神はエサウを斥けられましたが、エサウに対しては、それ相応の祝福が用意されているのです。そういうわけで、神に不正はありません。14節、15節です。〈それでは、どのように言うべきでしょうか。神に不正があるのでしょうか。決してそんなことはありません。神はモーセに言われました。「わたしはあわれもうと思う者をあわれみ、いつくしもうと思う者をいつくしむ。」〉とあります。「わたしは自分があわれもうと思う者をあわれみ、罰しようと思う者を罰する」と語っておられないことに注目してください。すべての人は、神のあわれみの対象であり、慈しみの対象です。それは、イスラエルの民を奴隷としてこき使い、手放そうとしなかったエジプトの王ファラオについても言えます。17節に〈聖書はファラオにこう言っています。「このことのために、わたしはあなたを立てておいた。わたしの力をあなたに示すため、そうして、わたしの名を全地に知らしめるためである。」〉とあります。ファラオですら、神のあわれみと慈しみを受ける対象なのです。

私たちは、すべてを理解することはできません。最後は神に委ねるしかありません。18節で語られているようにです。〈ですから、神は人をみこころのままにあわれみ、またみこころのままに頑なにされるのです。〉と。